

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	後期ビザンツ文献における前置詞 ε π #
Author(s)	橘, 孝司
Citation	ニダバ, 24 : 76 - 85
Issue Date	1995-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047958
Right	
Relation	



後期ビザンツ文献における前置詞 *ἐπί*

橋 孝 司

0. 序論

ビザンツ民衆文学の言語の一特徴として、多くの類義語の存在が挙げられる。特に問題となるのは、文体上のレベルを異にする類義語（ないし類義形態素）が同一テキスト中に共存する場合である。それらの間の意味論的差異を見出すことは容易ではない。例えば、次のような例において、二つの前置詞 *ἐκ* と *ἀπό* の意味的区別はほとんど認められない。

(1) *οὐ γὰρ εἶμι ἐξ ἀγενῶν, οὐδ' ἀπό των ἀνάνδρων, Διγ.Α.2096¹⁾*

「私は卑怯者臆病者の類ではない」

標準現代ギリシヤ語では *ἀπό* しか用いられず、*ἐκ* は定型表現において現れるだけなので、*ἀπό* に対して、*ἐκ* が古風なニュアンスを持っていることはほぼ確実である。また、ビザンツ民衆文学の多くが韻文（大多数が十五音節詩）で書かれている以上、形態の選択には韻律が関与していることも否定できない。そうすると、同一テキスト中に共存する複数の類義語の選択を律するのは、1) 文語体・口語体というスタイルの差、と 2) (韻文の場合) 韻律のみなのであろうか。もしそうであれば、文語体・口語体の諸形態の交替・出現は我々にはほとんど予測できない。書き手が古風な雰囲気醸し出したいと思えば、韻律が許す限りで、恣意的に文語体の形態を使っている、ということになるからである。その場合には形態自体の意味的対立が関与する余地はない。

筆者は、橋(1988)で、中世民衆語においては同義とされる二つの前置詞 *μετά* と *με* (ともに Comitative-Instrumental の機能) の間に (スタイルではない) 語彙自体の意味論的な差異を見いだそうと試みた。あらゆる場合に、明らかな語彙的意味上の差異が存在する、と主張するわけではないが、そのような差異が例証される場合もあることを、そこで示した。本稿は同様のアプローチに従い、ビザンツ後期 (ないしポスト・ビザンツ期) に属する散文作品「アレクサンドロス物語²⁾」(以下、「後期ビザンツ版散文」) に現れる文語体の前置詞 *ἐπί* がどのような語彙的意味によって、他の類義語と対立・共存しているのか、を明らかにすることを目的とする。この作品を選んだのには二つ理由がある。第一は、数少ないビザンツ民衆文学散文の一つであることで、韻律の影響を考慮する必要がないため。第二は、ビザンツの後期 (ないしポスト・ビザンツ期) に属するために³⁾、擬古体要素の

混入が少なく、かなり整一的な言語レベルで書かれている（このことはもっと古い時期の民衆文学作品—例えば、12世紀の「ディゲニス・アクリテイス」、「プトコプロドロミカ」や14世紀の「カリマコスとクリュソロエ」—と比較してみれば明らかである）にも関わらず、古い要素の ἐπί が用いられているのには（単なるスタイル以外の）何らかの積極的な理由があると予想されるためである。

1. 「後期ビザンツ版散文」における ἐπί

「後期ビザンツ版散文」中に観察される ἐπί の機能を分析してみると、概ね次の四つに分けられる⁴⁹。

A. 場所全体にわたる移動

まず、「ある場所全体にわたる動き」を示す例がみられる。

(2) τον έσυρε ἐπί το παλάτιν το βασιλικόν όλον F.116,4

「彼を宮殿中連れて回った」

(3) να τον διώξης ἐπί όλον τον κόσμον F.54,8 <από όλον τον κόσμον B>⁵⁰

「彼を世界中追い回すように」

(4) ηπήρεν τους ἐπί τον κάμπον διώχνοντας F.74,7 <από τον κάμπον B>

「平野を追い回して彼らを捕らえた」

(5) να κυνηγούν ἐπί το νησίη της Ολυμπιάδος.FE.19,5

「オリュンピアスの島で狩をする」

(6) εκυνήγουν ἐπί την άκραν του ποταμού Τίγρη F.124,4 <εις την άκραν B>

「チグリス河の河岸で狩をした」

もちろん、厳密に移動が場所全体にわたっているわけではないが、これらにおいて示される動作（σύρω「連れていく」、διώχνω「追う」、κυνηγώ「狩をする」）はある場所内の一点で行われるのではなく、その内部で多方向に移動することを前提としている。本稿では、このような、緩やかな意味での「場所全体への関わり」を「全域性⁵¹」として扱うことにする。「全域性」がさらに弱まった例として(7)(8)が挙げられる。

(7) ἐπί την μέσην τους επερχάτειεν FE.113,3

「彼らの間を歩いていった」

(8) ἐπί την μέσην καβαλλάρης εις τον Βουκέφαλον επερχάτειεν F.40,3

<εις την μέσην B>

「愛馬ブケファロスに乗って、その中を歩いていった」

ただし、(7-8)は、「不完全な通過」の例として、以下に述べるD.「通過」に分類されるべきかも知れない。

B. 場所全体にわたる結果・状態

A. に対して、必ずしも場所内で移動するわけではないが、行為の結果が場所全体に関わ

ると解釈される例がある。

(9) πεύκια μεγάλα άπλωσαν επί τον κάμπον F.125,3 <εις τον κάμπον B>

「大きな松を平野に敷き詰めた⁷⁾」

(10) ήσαν επί τα κλωνάρια πουλίτζια έμορφα περιποίγκιλα εκάθοντα επί τα

ξύλα F.80,3/ εκηλαδούσαν τα πουλίτζια επί τα δένδρη B.80,3

「枝には様々の鳥が止まっていた。／木々では鳥がさえずっていた」

(11) να σεβή το νερόν επί τα αυλάκια FE.55,17

「溝に水を注ぐべく」

(12) έβαλεν το νερόν επί τα αυλάκια F.55,18<=B>

「溝に水を注いだ」

C. 移動の終点

次に、述語動詞が移動の概念を含み、επίはその「終点」を示す例がある。

(13) πολλά αρίφνητα φουσάτα έπεσαν επί τον κάμπον αυτόν F.120,3<εις B>

「無数の軍勢がその平野に殺到した」

(14) έπεσεν επί την άκραν του ποταμού F.94,1<=B>

「河岸に突進した」

(15) ήφεράν τους επί τες κατούνες B.86,2<εις τον Αλέξανδρον F>

「彼らを陣營に連れていった」

D. 通過

最後に、移動の「終点」というよりも、「通過」として分類されるべき例が観察される。

(16) δοξιάτης...επί το δακτυλίδιν διαβάζει την σαγίταν του F.123,2

<εκ το δακτυλίδιν B>

「指輪に矢を通すほどの...射手」

(17) ουκάποτες έρχετον από την Περσίαν εις το ταξίδιν και εδιάβη επί την

Μακεδονίαν F.25,1 <απέ την Μακεδονίαν B>

「かつて、ペルシアから出征してマケドニアを通り」

(18) όλον το φουσάτον επέρασεν επί το γιοφύριν F.72,5

「全部隊は橋を渡った」

(19) εδιέβην επί την καμάραν αυτήν όλον το φουσάτον F.80,19

「全部隊にそのアーチ橋を渡らせた」

このように、「後期ビザンツ版散文」に見られるεπίの用法は、いくつかの時間用法を除いては⁸⁾、空間用法に限られている。以下に述べるように、古代ギリシャ語のἐπίに見られるような様々な非空間的用法は観察されない。

それでは、このような空間表現のεπίの機能(A.場所全体にわたる移動、B.場所全体にわたる状態、C.終点、D.通過)をさらに少ない意義素にまとめることは可能であろうか。A.

とB.が、ある場所の「全域性」に関わっているという点で関連し合っているのは明白である。移動が場所の全域にわたれば、その結果もまた場所全体に関わることになる。B.の例「溝に注がれた水」などはこの点をよく示している。

次にA.B.とD.との関係について考えてみよう。A.（およびB.の一部）が示す移動は単一方向ではない。むしろ、方向を頻繁に変えながら移動するため、その移動の結果が場所全体に関わる、という状況を含んでいる。これに対し、D.「通過」における移動は、通常は単一方向の動き⁹⁹であり、この点でA.B.とは非常に異なっているように見える。しかしながら、先の「全域性」という条件を考慮するならば、両者は関連し合っているように思われる。ある場所を「通過」するには、移動の主体が、その場所（例えば「橋」）の一方の境界から他方の境界まで位置を変えることが必要であり、その点で移動が場所全体にわたると見ることができるからである¹⁰⁰。

かくして、A.B.D.は、「全域性」という特徴により関連し合っている、と考えることが出来る。

ところが、C.「終点」は、この「全域性」とはうまくつながるようには思われぬ。そこで、*ἐπί* は大きく二つの意義素を持つ、と考えるのもいい訳であるが、同一形態で表現され、かつ両者の意味場も空間表現という点で類似している以上、何らかの関連性を見ることが可能ではないだろうか。この点を確認するためには、*ἐπί* が同一テキスト中で他の空間前置詞とどのように意味対立をなしているのかを考察してみる必要がある。

2. 「後期ビザンツ版散文」における他の空間前置詞

1 節で観察された「後期ビザンツ版散文」の*ἐπί* の諸機能は、同じテキスト中に含まれる他の空間表現の前置詞とどのように対立し合っているのだろうか。本節ではこの点が検討される。

0. 序論で触れられたように、「後期ビザンツ版散文」はかなり整一的な言語で書かれており、そこに見られる他の空間前置詞の代表的なものは *εἰς* と *ἀπό* である¹¹⁰。前者は「移動の終点(20)」、「対象の存在場所(21)」、後者は「移動の始点(22)」として頻用されている。

(20) *εσέβην ἀτός του εἰς το παλάτιν το βασιλικόν.* F.3,5<=E>

「彼は一人で宮殿に入った」

(21) *ήτον εἰς το σύνορον της Περσίας έναν κάστρον* F3,1<=E>

「ペルシアの国境に城があった」

(22) *έφυγε ἀπό το βασιλειόν του.* F.5,1<=E> 「彼は王国から逃れた」

また、この二つの前置詞は現代語におけると同様、多様な非空間的用法を有している¹²⁰。

さらに、次節で述べるように、古代ギリシャ語 *ἐπί* には、「垂直方向において、ある対象の上方」の意味があるが、この機能は「後期ビザンツ版散文」では *ἀπανάθειον*, *ἀπάνου* 等

の副詞(+前置詞)を用いて表される¹⁹³⁾。

(23)όλοι είχαν...απανώθεν τα σκιάδιά τους στεφάνια F.125,3 <απάνου εις τα σκιάδια B> 「全員が帽子の上に花冠をのせていた」

以上から、*επί* は空間表現に関わるが、「移動の始点」「対象の上方」の用法を持たず、且つ「場所全体にわたる移動・結果・状態」「通過」の用法を持つ、という点で他の前置詞(及び副詞)と意味的対立をなし、積極的な存在理由を持っているように思われる。

「移動の終点」に関しては*εις* と意味領域が重なっているようにみえるが、それらの例を対照させてみると、*επί* の「終点」はどのような場合でも良いのではなく、ある特徴を備えていることが分かる。というのは、*επί* が用いられているのは、多数の動作主体がある広がりを持つ場所に移動する場合(「無数の軍勢が平野に(13)」「[軍勢を率いたインド王が] 河岸に(14)¹⁴³⁾」「[軍勢が] 彼らを陣営に」(15))であって、その結果移動した主体(及び移動させられた対象)の位置は場所全体に関わることが含意されている。この点で、*επί* における「移動の終点」は、他の機能の「全域性」に通じるように思われる。これに対し、*εις* の示す終点は(本性上広がりを考え難い)人間でも構わないし(*ήφερέ τον εις την μητέρα του* F.17,2「彼を母親のところへ担いで行った」)、単一の動作主体が移動する場合でも良い(*εσέβην εις έναν τόπον κρυμμένον* F.5,2「彼は人目につかない場所に入った」)。興味深い例として、(15)では、E版の *επί* *τες κατούνες*「陣営に(連れていった)」に対し、F版では移動の終点が人間であり、*εις* に支配されている(*εις τον Αλέξανδρον*「アレクサンドロスのところに」)。

したがって、*επί* の機能の一部は広範な*εις* の意味領域と重なりはするが、それは「全域性」という意味特徴を通じて、*επί* の他の機能と関連し合う部分である。

3. 通時的考察

本節では、古代ギリシャ語・標準現代ギリシャ語との比較を通じて、前節までに観察された「ビザンツ版散文」の*επί* の機能を、通時的観点から解釈してみることにする。

まず、古代語の *ἐπί*¹⁵³⁾ は、属格・与格・対格のいずれとも結びつく。印欧祖語から受け継がれたその原義は、「支えとなるものの上に¹⁶³⁾」「表面に接して¹⁶³⁾」であるが、これは結合する名詞の格自体の意味と絡み合って、「表面上の位置」「表面付近の位置」「表面への移動」等と微妙に変容する¹⁷³⁾。また、支えとなる対象の形状と関連して「垂直方向において、対象の上部」としても現れる¹⁶³⁾。さらに、具体的な空間・時間表現のみならず、抽象的な用法(「根拠」「目的」「条件」「追加」「関連」等)も発達させている。

「後期ビザンツ版散文」の*επί* の用法が継承していると思われるのは、対格と結びつく際の機能である¹⁶³⁾。古代語 *ἐπί* は、対格形自体の意味に応じて、「表面の広がり(「広がり」の対格²⁰³⁾より)」と「移動の終点(「目標の対格²¹³⁾より)」の意味を持つ。これらのそれぞれが、「後期ビザンツ版散文」の*επί* の機能A.B.とC.に対応していると考えら

れる。ただし、C.「終点」は古代語の場合より制限されており、Schwyzer(1950:472)に記述されているような、「下から上への垂直な移動²²⁾」や人間が目標となる例²³⁾には使用されていない(これらはそれぞれ、空間副詞 *ἀπανώθεν/ἀπάνου* と *εἰς* とで表現される点は2節でみた通り)。また、「根拠」「目的」等の非空間的な用法もここには見られない。すなわち、「後期ビザンツ版散文」*ἐπί* の機能は、古代語 *ἐπί* の広範囲な諸機能の内の一部のみに対応している。しかし、一部とは言え、その機能は「全域性」という点で、意味論的にあるまとまりをなしていると考えられる。さらに、非古代語的用法のD.「通過」もこの同じ意味特徴を通じて、他の機能と関連し合っている。

次に、標準現代ギリシャ語と比較してみよう。まず、前置詞 *ἐπί* 自体は、定型表現においてしか使われない。他方、その機能は他の前置詞によって表現されるに至っている²⁴⁾。「後期ビザンツ版散文」との比較で言うと、A.B.「ある場所全体にわたる移動・状態」は前置詞 *σε+場所名詞* で表現される。「全域性」をより明確に表すには形容詞 *όλος* 「全ての」が名詞の前に置かれる(すなわち *σ'όλο+場所名詞*)。((24-26)の用例は Stavropoulos (1988)より。)

(24) *το νερό άπλωσε σ'όλο το πάτωμα.* 「水が床中に広がった」

C.「移動の終点」も同じく前置詞 *σε+場所名詞* で表現される。例えば、

(25) *φτάνω στη Ρώμη.* 「ローマに着く」

これに対し、そもそも古代語 *ἐπί* には見いだされないD.「通過」は前置詞 *από+場所名詞* で表される。

(26) *Περνάει από το δρόμο κάθε πρωί με το σκύλο της.* 「毎朝犬を連れてその道を通る」

これらの対立は、18世紀にベネチアで出版された「アレクサンドロス物語」の「現代語版散文²⁵⁾」において既に観察される。「後期ビザンツ版散文」に対応した例を挙げると、

A. 場所全体にわたる移動

(27) *εγύρισε τον εἰς όλον το παλάτι* Φ.243 「彼を宮殿中引き回した」cf.(2)

(28) *να τον κυνηγήσης καταπόδι εἰς όλον τον κόσμον* Φ.115 cf.(3)

「世界中彼を駆り立てるように」

B. 場所全体にわたる結果・状態

(29) *εἰς τους κλώνους των δένδρων εκάθονταν πουλία περισσά πολλές λογές* Φ.179

「木々の枝には実に多種の鳥が止まっていた」cf.(10)

C. 終点

(30) *ετέντωσε το φουσατόν του όλον εἰς τον κάμπον.* Φ.259 cf.(13)

「全部隊が平野に達した」

(31) *ετέντωσεν εἰς την άκραν του ποταμού* Φ.203 cf.(14)

「河岸に達した」

D. 通過

(32) ἀπό την μέσην του δακτυλιδίου διαβαίνει την σάϊτταν Φ.268 cf.(16)

「指輪の真ん中に矢を通す」

(33) εδιάβαινε ἀπό την Μακεδονίαν Φ.31 cf.(17)

「マケドニアを通り過ぎていた」

このずれは、「後期ビザンツ版散文」における ἐπί の意味概念が、現代語では、二つの異なる前置詞 σε 及び ἀπό の意義素に対応する点からきている。すなわち、現代語では、移動の始点・途中経路に関わりなく、終点がある場所内であれば σε が、場所の外であれば ἀπό が用いられる²⁶⁾。それ故、移動の終点がある場所内にあるA., C.と常に場所内に存在するB.には σε が対応するが、終点がある場所外にあるD. (そうでなくては「通過」行為が成立しない)には ἀπό が対応するのである。

以上の通時的考察をまとめれば、「後期ビザンツ版散文」 ἐπί は、古代語 ἐπί の示す概念の一部と他の概念(「通過」)とを同一範疇化する形態であり、それは現代語でも複数の異なる形態 (σε と ἀπό) に対応する意味領域である。しかし、だからといって、それが関連のない雑多な複数の諸概念に、単に古風なニュアンスを帯びさせようという意図によって、割り当てられた擬古体形態ではなく、空間の「全域性」という意味特徴により相互に関連しあつた意味領域を覆う形態である、と考えられる。

4. 結論

本稿では、後期ビザンツのテキストにしばしば観察される、スタイルを異にした類義語の共存を説明する一条件として、(擬古体・口語体といったスタイルの違いとは別の)意味論的な接近を試みた。ひとつの事例研究として、「後期ビザンツ版散文」の前置詞 ἐπί の用法の分析した結果、εις, ἀπό, ἀπανάθρον, ἀπάνου といった他の形態の機能と部分的に重なり合いながらも、独自の意味領域を有していることが分かった。その意味領域は、古代語・現代語では、複数の異なる形態によって表現されるけれども、共通の意味特徴によって相互に関連した諸概念の複合体であり、それをカバーする点で ἐπί は積極的な存在理由を持っていた。

後期ビザンツ・テキストの類義語の共存にとって、スタイルと(韻文の場合)韻律が重要な要因であることは疑いない。しかし、類義語間の語彙的意味自体が、その要因をなしており、且つ(より重要なことには)、それが例証され得る場合があることを本稿の観察は示している。

注

*)本稿は平成六年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

1)「ディゲニス・アクリテイス」A版(Καλονάρος, 1970).

- 2) テキストは Lolos(1983) と Konstantinopoulos(1983) の F 版と E 版 (F.: Laurentianus Ashburnham, 1444/ E.: Eton College 163)、引用は章・段落番号による。この二つの版は、「後期ビザンツ版散文」を伝える 13 の写本のうち、最も古い時期に属し (注2 参照)、エピソードを完全に伝えているという点で、作品の代表的な写本とみなされている (Moennig, 1987: 46-52, 1992: 45)。
- 3) 写本の書写年代は F 版 1521 年、E 版 16 世紀前半から半ば (Moennig, 1992: 42)。「後期ビザンツ版散文」自体の成立年代は、12 世紀から 16 世紀まで諸説あるが (Holton, 1974: 10)、最新の Moennig(1992: 33, 144) によれば、15 世紀。彼は「後期ビザンツ版散文」は、従来言われていたように直接「偽カリステネス」の ε 版に由来するのではなく、これに関連した中世セルビア語版からの逆翻訳である、という立場を取っているので、この年代はその翻訳が成立した年代を示している。

4) Κριαράς の中世民衆ギリシャ語辞書は επί の用法を以下のように分類する。

- I. 場所 1) 静止 a) ~ の上に (επάνω σε) β) ~ に (σε)
 2) 移動 a) ~ に向かって (προς) β) ~ に対して (εναντίον)

II. 継続時間

III. 方法

IV. 関連 1) ~ に関して 2) ~ によれば

V. 原因 1) ~ が原因で 2) ~ のために

VI. 目的

VII. από の代用

「後期ビザンツ版散文」の επί はこのうち I, II, VII. の空間時間用法に限られている。VII は意味的分類というよりも、非古代語的 (すなわち現代語的) な用法であるために別項目として立てられたと思われる。現代ギリシャ語の από は多義であるが、Κριαράς の二つの引用例 (μικρόν και επαρέκυσεν εφ' ένα παραθύρι, Βέλθ. 831 「少し窓から身をのり出した」、οι χωρίζοντες αδελφούς επί αδελφών, Απόκ. Θεοτ. (Pern) 249 「彼らは兄弟から兄弟を引き離し」) から考えて、「通過」ないし「分離」の用例として挙げられているようである。「後期ビザンツ版散文」επί のうち、現代語 από に相当する用例はいずれも「通過」と解釈すべき例である。

5) 問題の前置詞に関して一方の写本の読みが異なる場合、<...B> または <...F> で示される。前置詞に関係しない小さな異同の場合は <=B> で示す。

6) 「全域性」の用語は荒井(1992: 78) から採用。定義については注 10) 参照。

7) アレクサンドロスの部隊を皇后・王妃が出迎える場面であるが、具体的に松をどのように用いるのか不明。Moennig(1992: 294-5) は、"Vor den Königinnen, die aus dem goldenen Wagen steigen, breitet man Teppiche aus" と注釈し、参考例として、「ディゲニス・アクリテイス」G 版でも、歓迎に際して草花からなる絨毯が広げられている場

面を引用する。

8)例、Ἐπί ἑτους πέντε χιλιάδες εβασίλευσεν εις την παλαιάν Ρώμην F.1,2<E>

「五千年に古ローマで王位にあった」

Ἐπί την αύριον ημέραν υπήγεν εις την βασίλισσα F.11,3

「翌日王妃のところに行った」

9)「一方向性」及び「全域性」は、日本語の通過表現にあらわれる格助詞「を」(「～を通る」)の機能を議論する中で提出された概念(荒井,1992:77ff.)を利用した。

10)荒井(1922:78)では「移動が全域にわたる」の解釈として、「ヲ-場所 [= 助詞ヲ+場所名詞]が『基本的に一次的な延長』であるときは、移動がその場所の一つの端から、他の端に至ることを意味し、それが、二次元・三次元の場所であるときは、移動の軌跡がその場所の中心(あるいは中心線・面)を通り、それゆえ同じ地点からその場所に入った他の移動の軌跡よりも長いものであることを意味するように思われる」とする。一次元(すなわち線状)の場所に関する説明は、我々の「橋」の場合に当てはまる。

11)擬古体 *εκ, εν* 等の用法はかなり制限されている。

12) *εις*: 目的・関連、*από*: 部分・受動態の行為者など。

13) *απανάθειον* は「後期ビザンツ版散文」中で常に対格名詞を伴うので、前置詞と分類することも可能である(cf. Tachibana, forthcoming).

14) *την άκραν του ποταμού* 「河岸」は例(6)でも *επί* とともに用いられており、「後期ビザンツ版散文」中で、広がりを持つ場所としてとらえられているようである。

15) 古代語 *επί* の機能については、Schwyzer(1950:465-473), Humbert(1982:308-310), Chantraine(1953:105-112)に従う。

16) 'auf' (in Berührung mit der Unterlage), 'auf einer Fläche hin' (Schwyzer, 1950: 465), contact avec une surface (Humbert, 1982:308).

17) 格形による意味の差が明瞭な例として、*επί νηῶν* (Gen.) 「船上で」、*επί νηυσίν* (Dat.) 「船の側で」、*επί νῆας* (Acc.) 「船の方へ」(Chantraine, 1953:111).

18)例、επί τὰ ύψηλότατα τῶν ὀρέων ἀναβαίνοντες 「高い山に登って」 Hdt.1,131 (Schwyzer, 1950:472).

19)Schwyzer(1950:471-473),Humbert(1982:310).

20)Akk. der räumlichen und zeitlichen Erstreckung (Schwyzer,1950:471).

21)Akk. des Ziels (Schwyzer,ib.).

22)επί πύργων ἔβη 2386. 「城壁の上に向かった」。

23)βῆ δ' ἄρ' επί Ἀτρείδην B18. 「アトレウスの子の方へ歩んだ」。

24)Cf. Jannaris(1987:366),Humbert(1982:310).

25)テキストはΒελουδής(1977)、初版本の頁数により引用。

26)橋(1994)参照。

引用文献

- 荒井 文雄(1992)「移動動詞の意味構造とアスペクト極性」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』14巻1号,55-105.
- Βελουδής,Γ.(1977) *Η Φυλλάδα του Μεγαλέξανδρου, Διήγησις Αλεξάνδρου του Μακεδόνοσ. Αθήνα.*
- Chantraine,P.(1953) *Grammaire Homérique, 2, Syntaxe.* Paris.
- Holton,D.(1974) *The Tale of Alexander, the Rhymed Version. Critical Edition with an Introduction and Commentary.* Thessaloniki.
- Humbert,J.(1982^a) *Syntax Grecque.* Paris.
- Jannaris,A.N.(1897/rpt.1987) *An Historical Greek Grammar.* London.
- Καλονάροσ,Π.Π.(1941/rpt.1970) *Βασίλειοσ Διγενήσ Ακρίτασ, τα έμμετρα κείμενα Αθηνών, Κρυπτοφέρρησ και Εσκοριάλ. Τομ.1. Αθήνα.*
- Konstantinopoulos,V.L.(1983) *Ps.-Kallisthenes: Zwei mittelgriechische Prosa-Fassungen des Alexanderromans. Teil 2.* Königstein.
- Κριαράσ,Β.(ed.)(1968-) *Λεξικό τησ μεσαιωνικήσ ελληνικήσ δημόδοουσ γραμματείασ. Θεσσαλονίκη.*
- Lolos,A.(1983) *Ps.- Kallisthenes: Zwei mittelgriechische Prosa- Fassungen des Alexanderromans. Teil 1.* Königstein.
- Moennig,U.(1987) *Zur überlieferungsgeschichte des mittel- und neugriechischen Alexanderromans.* Köln.
- Moennig,U.(1992) *Die spätbyzantinische Rezension * des Alexanderromans.* Köln.
- Schwyzer,E.(1950) *Griechische Grammatik, 2, Syntax und syntaktische Stilistik.* München.
- Stavropoulos,D.N.(1988) *Oxford Greek-English Learner's Dictionary.* Oxford UP.
- 橘 孝司(1988)「中世ギリシヤ語叙事詩『ディゲニス・アクリタス』におけるComitative-Instrumentalの表現形式について」『ニダバ』17,21-33.
- 橘 孝司(1994)「現代ギリシヤ語の前置詞と意味条件『領域』『絶対・相対定位』」『ニダバ』23,pp.64-73.
- Tachibana,T.(forthcoming) "Syntactic Structure of Spatial Expressions in the 'Late-Byzantine Prose Alexander Romance'". 『プロピレア』6.